

I 「目黒区学力調査」の概要

1 調査の趣旨

目黒区立小・中学校の児童・生徒に「学力調査」を実施し、児童・生徒の学習状況を組織的・継続的に調査・分析するとともに、各学校の指導法やカリキュラムの改善・充実を図り、学力の定着・向上を目指す。

なお、本調査は、目黒区立小学校の第2学年～第6学年の児童及び目黒区立中学校の全学年生徒を対象に実施された。（原則として、特別支援学級に在籍する児童・生徒は対象としない）

2 調査の内容

(1) 調査の対象学年及び対象児童数（本校）

	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
対象数	64 人	65 人	73 人	53 人	62 人
実施数	62 人	64 人	72 人	52 人	60 人
受検率	97%	98%	98%	98%	96%

(2) 調査内容と実施教科

① 学習指導要領に示された目標の達成状況（観点別学習状況）

② 児童の学習に関する意識

2年 意識調査、国語、算数

3年 意識調査、国語、算数

4年 意識調査、国語、算数、理科

5年 意識調査、国語、算数、理科

6年 意識調査、国語、算数、理科、社会、英語

(3) 実施日

令和5年4月13日（木）

Ⅱ 令和4年度「授業改善プラン」の検証

(1) 成果

- 国語科と算数科では、どの学年も標準スコア（全国値の正解率を50としたときの換算値）を上回り、基礎的な学力が身に付いている学年が多い。主体的な学びの充実に向けて初発の感想からグループ等による意見交換を通して学習課題や学習計画を設定する学習場面を意図的に設定することができているので、発達の段階に応じた指導方法をさらに進めていく。
- 昨年度までの研究でつくり上げた「八雲スタンダード」（つかむ段階 追求する・深める段階 振り返る・ひろげる段階）を基にした授業展開を、他教科にも活用したことで、児童自らが問いをもち、自分の考えを試してみたい、やってみたい、という思いをもって授業に参加することができた。
- 学習の見通しがもてるような教室掲示により、子どもたちの学びの過程や既習の学習内容を客観的に振り返る機会を意図的に設定することができたことで、子どもたち自身に自分の力で学びを振り返る力を育み、知識の理解や学び方の定着を促すことができた。
- 国語科では、初発の感想を生かして学習計画を立て、子どもたちと追究する課題を共有しながら指導することで、子どもたちが自分たちの学びを自覚して意欲的に学習する姿を引き出すことができた。
- 各教科において、自分の考えを書く・話す力の育成に加え、ペアトークやグループでの意見の交流を通して聴く態度の育成を目指したことで、友達の考えを基に自分の考えを広げたり、相違点を明確にして自分の意見を再構築したりすることができるようになってきており、授業中の意見交換が活発になってきている。
- 継続してノート指導を重点的に行ったことで、どの教科でも児童がノートに自分の考えを多く書くようになった。
- 年間約30回の学習タイムの実施により、基礎的・基本的な知識、技能の定着を図ることができた。また、自己の学習を調整しようとする力の伸長につながることができた。
- 児童理解の力を伸ばす特別支援教育研修会や、学級経営力、授業力向上のための示範授業や模擬授業、講演会等による研修を通し、教員自身が行きたい課題や改善策を見付けることができた。また、実践を研修記録に残すことで、授業改善の方向性や学級経営方針が明確になった。

(2) 課題

- 国語科では、特に低学年・中学年では、自分の考えをかくこと、高学年では説明文の読み取りに課題が見られた。よって、自分の考えを文章で表現する機会を設定するとともに、正しい文章となっているか、書いた文章を読み返したり、友達と読み合ったりする活動を授業の中に取り入れる活動を取り入れていく。また、説明文では、文章構成を把握して、筆者の伝えたいことを読み取れるように授業改善を図っていく。総じて、低学年からの基礎学力の定着をねらい、教師主導で学習計画を立てる段階から高学年に向けて、徐々に子ども主体で学習計画を立てられる段階へと移行できるようにしていく。
- 算数科では、どの学年も標準スコア（全国値の正解率を50としたときの換算値）を上回り、基礎的な学力が身に付いている学年が多いものの、自分の考えを記述する問題に課題がある学年も多い。引き続き学習タイム等を有効に使って基礎学力の定着を図ると同時に、習熟度別指導を充実させ、式で表したことを図や数直線などを使って伝え合ったり、学習用情報端末を活用して他者の多様な考えを共有したりする機会を意図的に設定し、個に応じた指導の充実に努めていく。
- 理科では、観察の視点や実験の考察について課題が見られるため、既習した学びや子ども自身の経験から予想（仮説）を考え、見通しをもって観察・実験を行い、結果から気付いたことや考察

したことを伝え合う学習活動を積み重ね、結果を比較したり関係付けたりする科学的な思考力を養う。

- 社会科では、資料から情報を読み取ることに課題が見られるため、「資料□からは～が読み取れます」など日常的に資料を読み取る活動を設定する。また、資料（地図、グラフ、表）を読み取る際に、読み取れる事実と社会的事象とのつながりを関係付けて考えをもてるように働きかけ、空間的ものの見方や時間的なものの見方を養っていく。
- 英語科では、他の領域と比べて得意な児童と苦手な児童の語彙力の差が大きいため、学習用情報端末を活用して、発音が分からない語句を調べたり、簡単なやりとりを繰り返し行ったりすることで外国語に初めてふれる児童も安心感をもって学習できるようにする。

Ⅲ 目黒区学力調査等に基づく授業改善プラン

本校の授業改善に向けた方策

- (1) 4月に実施された目黒区学力調査の結果を受け、学年・学級で課題となる領域を把握する。今後の授業では、その課題となる領域について既習事項を確認し、指導の工夫を行い、具体的な手だてを講じて確実な習得を目指す。同時に、個々の課題を明らかにし、学習用情報端末も活用しながら個に応じた指導の手だてを講じていく。
- (2) 水曜日以外の週4日、15分の帯時間を活用し、国語・算数の基礎・基本の学力向上を目指す。国語の時間では、言葉や漢字の学習を行う。また、算数の時間では、学習用情報端末の「ドリルパーク」を活用し、基礎・基本の計算技能の定着を図る。
- (3) 「八雲スタンダード」である「八雲の8つの学び」を各教科に広げ、児童一人ひとりが夢中になって学び、考え、表現する楽しさを味わう授業づくりを展開していく。そのために、興味・関心のわく問題との出会いや、ある課題に対して自分で考えたい問いをもつこと、また、自分で筋道を立てて課題解決の計画を立てること、「わかった」「できた」「もっと知りたい」という達成感や探究心をもつことができるような手だてを、意図的に授業に取り入れていく。

「八雲の8つの学び」

- ①教材・問題とかかわり、問いをもつ。
- ②問いをもとに、めあてを見付ける。
- ③既習内容を想起し、解決の見通しをもつ。
- ④既習内容を活用して自力で解決する。
- ⑤考えを共有し、深め、高める。
- ⑥育った見方・考え方やできるようになったことを振り返る。
- ⑦学習したことの定着を確かめる。
- ⑧新たな問いをもち、学習をひろげ、次につなげる。

- (4) 校内研究（国語科）では、読むこと（物語教材）の指導を通して、言葉に着目しながら全体を想像していく力や、登場人物の心情を読み取る力を育てていく。子どもが追究したくなる課題を引き出し、言葉による見方・考え方が働くような問いかけ、問い返しを工夫することで、子ども一人ひとりが考え、表現する力を高め、伝え合う楽しさを味わうことができる授業づくりを実現していく。また、学校図書館を活かした、読みを広げる読書指導を積極的に行っていく。
- (5) 学習用情報端末の効果的な活用方法について、データで引き継いでいくと同時に、教職員用クラスルームやロイロノートでの即時的な発信、GIGA支援員との連携、研修会の実施等で共有し、八雲小学校全体で学習用情報端末を効果的に活用できるよう教員の指導力向上に努める。

- (6) 「授業づくりチェック表」を引き続き活用し、学習規律やその他授業全般のこと、学級経営について数値化することで、授業力の向上を図る。
- (7) 年2回、授業公開の場を設定する。その際には、授業者は全教員に指導案を配布し、互いに学ぶ場とする。授業後には意見を交換し、授業力の向上を図る。また、月1回程度、学習用情報端末の有効活用についての情報交換を行う場を設け、八雲小学校全体で学習用情報端末の活用度の向上に努める。
- (8) 「名人の授業を見る会」を設定し、授業を通して学級経営をよりよくしていく方法を学ぶ。研修記録を基に、自分でできる実践を明確にして取り組んでいく。